

# はじめに

附属紀伊・黒潮生命地域フィールドサイエンスセンター長 渡辺晋生

令和4年度は、生物資源学部100周年に続き、フィールドサイエンスセンター（FSC）も発足20周年を超えて21年目と、新たな一步を迎える年度でした。コロナ禍においては、FSCの大事な側面である「実物を見て触って考える」という場を、教育、研究、社会連携のいずれにおいて十分に整えることが難しい状況を余儀なくされました。しかし、本年度はいくつかのイベントと講座を除き、制約のある中ではありますが多くの取り組みを再開することができました。一度停止していた場の再起動は大変な労力を伴うことであり、年々教職員数が減っている中、多大な努力のもと各施設とも十分な成果をあげられたと考えます。

また、本学の掲げるビジョン2030、「地域・社会・世界とのつながりを通して行動を引き出す教育」、「社会競争を支える多様で独創的な研究」、「三重モデル地域創生」においても、あるいは来年度に迎える生物資源学部の改組においても、フィールドDX教育の推進や、それに基づくバイオDX人材と地域環境人材の育成、紀伊黒潮生命地域を起点とした特色ある多様な先駆的研究と分野横断型研究の展開、そしてFSCの各施設や練習船を利用した基礎的研究に基づく現場適応型の研究の推進など、FSCに求められる要素は多々あります。FSCは様々なフィールドデータの宝庫でもあり、コロナ禍で進んだオンラインコミュニケーションの利用拡大やインフラ設備と合わせ、生物資源関連産業をDXで支える地域人材の育成や、脱炭素社会に向けた教育研究などへの貢献がますます期待されます。こうした期待にも応え、本学学生の教育や研究業務に加え、今後ますます共同利用や社会貢献活動を強化していくためには、教職員それぞれが自らの置かれた立場を理解して協力しあい、目標達成に向けて努力することが重要です。教職員間の相互理解・協力体制を強化し、これまで以上の合理的な運営や活動を推進する必要を強く感じています。

最後に、皆様方にフィールド教育・研究の重要性について更なるご理解とご支援をお願いするとともに、本書の発行にご尽力頂いた各位に感謝する次第であります。